生田長江門下の赤松月船
―赤松月船における詩的世界の確立と発展―

定金　恒次
倉敷芸術科学大学留学生別科

（2007 年 10 月 10 日　受理）

1　文学への渇望――仏道修行と人間的煩悩との相克

赤松月船（曹洞宗の高僧・詩人，1897 ～1997）は，総本山永平寺で修行中，仏道修行と人間的煩悩の相克に苦しむ。

永平寺界隈は日本でも有数の豪雪地帯である。冬季はあらゆる交通が途絶し，外界からの来訪者も物流も遮断される。雲水たちは孤立した世界で，酷寒と寂寥に堪えなければならない。そしてひたすら修行のかたわら，屋根の雪おろしや境内の除雪作業に従事しながら春の到来を待ちわびる。やがて春先，越後からの寺への参拝の一団を迎えることによって，長く過酷であった冬の終焉を感じ，抑圧されていた心の躍動を覚える。

ところが，そうした参拝団の中に若い娘さんがまじっていて，その夜は彼女も寺に宿泊する。夜になると雲水たちは日課の坐禅を始めるが，不思議にも広い坐禅堂の随所から一種異様のざわめきがわき起こり，それが堂の中央で一大騒音となってぶつかるのである。実際にはだれ一人声をたてているわけでもないのに，確かに騒音だけは聞こえるというのである。長老の指導僧が「静かに」と一喝するとそのざわめきはぴたりと止まるが，しばらくするとまた発生する。とうとう老僧が「こんな不謹慎な坐禅はだめだ。」と中止を宣告する。――長い冬の間，閉じ込められた環境の中で過ごしてきた修行僧たちにとって，人間の柔肌のあたたかさを恋い慕う心は想像に絶するものがあるのだ。たまたま一人の若い女性が寺に泊まったというだけで，抑圧されていた雲水たちの欲望のときめきがわき起こったのである。こうした修行僧たちの赤裸々な煩悩の姿を目（ま）のあたりにした月船は，坐禅と煩悩との矛盾を自らの修行の一大テーマとして追求していくことを決意するとともに，それに堪え，それを克服してより高い境地に達することこそ修行の究極の目標ではないかと自らを叱咤する。

時あたかも，広島県庄原村（現庄原市）出身の劇作家倉田百三の戯曲『出家とその弟子』がベストセラーとなる。これは 1916（大正５）年，百三自身が主宰する同人誌「生命の川」（「白樺」の衛星誌）に発表，翌年６月岩波書店から出版した作品である。大正期宗教文学ブームの先駆であり，大正時代が生んだ思想文学の最高傑作である。この作品は作者倉田百三の分身，青年僧唯円（親鸞の弟子）が恋に身を焦がしながらも，あくまでも純粋な信仰に生きようとする姿を中心に，恋愛と性欲，宗教と愛欲の相克に苦しむ様子を克明に描

いたものである。一読した月船は全身に水を浴びせられたような鮮烈な感銘を覚える。それは月船自らが，坐禅堂で体験した修行と情欲との葛藤の問題を如実に提起していたからである。月船はこうした傑作を書いた倉田百三に強い畏敬の念をいだくとともに，「文学」そのもの力の強大さに改めて心を打たれるのであった。そうすると幼少時代からくすぶり続けてきた文学への思いはますます強いものになり，いても立ってもおれぬような衝動にも似たものを感ずるに至る。ついに意を決して文学への道を歩むべく永平寺を去るのであった。1918（大正７）年３月，月船21歳のときである。

同年５月，月船はいったん僧籍を離れて上京，芝愛岩山下の仏教館に身を寄せて同館発行の仏教関係の新聞雑誌の編集業務に従事。かたわら「静雨会」と称する文学懇話会に入り，当時学生であった片岡良一，横光利一らと親交を深めながら小説批評や文学動向の分析に没頭する。これが機縁となって川端康成，片岡鉄兵らを知るに至り，新感覚派の文学にも興味をいだくようになる。そして月船自身も同派の機関誌「文芸時代」に「永平寺」と題する小説を寄稿するのである。

２　生田長江に師事――同人詩誌「月光」を出す

1920（大正９）年３月，23歳になった月船は「静雨会」の友人伊福部隆輝の紹介で生田長江（1882～1936）の門に入り，本格的な作家修業にのり出す。長江はホーマーの「オディッセイ」全訳のほか，ダンテの「神曲」，フローベルの「サランボウ」，ゲーテの「詩と真実」，ニイチェの「ツァラトゥストラ」などの翻訳があり，明治から昭和初期にかけて思想文学の最高峰として日本の評論界に君臨。またニイチェ研究の第一者として活躍，『ニイチェ全集』全12巻を完成した功績も大きい。さらにはいわゆる「白樺論争」を提起するなど，文学評論家としても一家をなしただけでなく，新しい文学運動にも力を尽くしたため，当時の日本文壇に大きな影響力をもった人物である。したがって，長江門下には数多くの文学志望の青年たちが集まり，指導を仰いだ。

当時門下に出入りしていた人たちには，後に小説「橋のない川」で名声を博した住井すゑや詩人の生田春月，さらには島田清次郎，高群逸枝らの俊秀がおり，月船もそうした人たちの感化を受けながら，本格的な文学修業への第一歩を踏み出したのである。

長江は門下の文学志望者たちに外国文学のもつ想像力の広大さと確固とした小説文体とを体得させるべく，もっぱら外国文学の翻訳作業に携わらせた。月船ら小説家をめざす青年たちは連日長江を囲み，作品作家批評のほか文壇の動向，文学のあるべき姿などを語り合い，率直で斬新な文学談義に明け暮れた。やがてだれ言うとなく「夏日避くべし，冬日親しむべし」という句にちなんで，「冬日会」と命名する勉強会を設立した。さらにこの勉強会から同人詩誌「月光」が誕生するが，月船はそのその経緯と自らの活動を次のように語っている。

私たちは小説月評，作品解説などを先生から聞きながら，いろんな意見を述べていましたが，ある時私が「このごろの詩は，ほこりっぽくて本当の詩ではない」と評したところ，先生は「それじゃあ，君たちが詩を書いてみたら」と言われるので，10人ぐらいの弟子がそれぞれ詩を書いて持って行ったんです。

先生は「こんなうまい詩が書けるなら，一つ雑誌を出そうじゃないか」と言われ，「月光」という詩の同人雑誌が生まれました。そして長江先生の口述を私が筆記して雑誌の表紙裏に「月光宣言」なるものを載せました(1)。

その「月光宣言」の要旨は，「すべての文学は，詩から出発するか，または詩に帰着するものでなければならない。いまの小説には詩がなさすぎる。詩を書いている人の中にもそれがない。われわれは詩を書くより前に，詩人であるより前に，よりよき人間になるという志を持たなければならない(2)」というものであった。

このように，同人詩誌「月光」は月船主導で誕生する。しかし月船自身をも含めた同人たちは，小説家にはなりたくても詩人になる気は全くない若者ばかりであったという。月船はこう続ける。

私はだれに遠慮することなく，思い切った作品発表や批評活動を続けていました。詩壇的な野心がないのですから大胆で，ようしゃない意見がはけたわけです。しかし，そのためにくまれ役を一手に引き受け，（私の酷評のせいで）詩人としてすぐれた素質を持ちながら，詩壇に認められずに終わった同人が幾人も出ました(3)。

このようにして月船は，生田長江という大きな精神的支柱を得るとともに，切磋琢磨しあう大勢の仲間に出会い，自分でも気づかぬままに，「詩」の道にのめり込んでいったのである。

3　詩作に精励――詩人としての道にのめり込む

同人誌「月光」は月船の発言が契機となって誕生したという経緯から，原稿募集・編集・発行等の実務もまた月船主導で進められた。しかもこれを主宰する長江，編集に携わる月船，ともに人望が厚かったため，「月光」には佐藤春夫，高村光太郎，室生犀星，野口米次郎ら，当代一流の詩人がゲストとして寄稿した。特に高村光太郎は，詩や彫刻など自らの芸術作品を換金することを潔しとしなかったため，「詩」に対して純粋な気持ちで取り組む長江や月船らの真情に共鳴し快くかつ積極的に寄稿を続けた。

こうした一流詩人をゲストに迎えたことで，「月光」誌の価値は高まり，月船の詩壇での知名度と交友範囲は飛躍的に拡大しただけでなく，彼はまた生涯の知音をも獲得する。と同時に月船の詩的世界はますます深化し，詩嚢もまた豊かになっていくのであった。当然のことながら「月光」に投稿する作品もおのずから詩に重点がおかれるようになり，いつの間にか詩人呼ばわりされるようになる。しかし月船自身にとっては詩はあくまでも余技であって，小説家になろうという願望は捨ててはいなかったのである。

ただ月船は，「詩」と「小説」との間には根本的な違いがあって，この違いを克服しない限り詩人から小説家にはなれないと，次のような自論を開陳している。

詩は十のものを一つに象徴化したことばで表現するのに対し，小説は，一つのものを十に分解して書き分けるといってよいでしょう。発想自体が詩と小説では，根本的に違っているわけです。佐藤春夫，室生犀星らが，詩から小説へ変わった当時は，人知れず苦労しただろうと思います(4)。

これは，長江門下で体得した月船の詩と小説に対する独特の見解を述べた興味深い文学論であるといえよう。こうして小説家への道を志しながら，なかなか小説執筆に着手しようとしない月船に対して，「文芸時代」以来の友人川端康成が「君は，いつ小説を書くんだ？」と尋ねる。月船が「おれ，そのうち書く。」と答えると，康成は「そのうち書けないだろう。」と切り捨てたという。月船は後年，予言を的中させた川端に敬服するとともに，小説家としての道に足を踏み入れえなかったおのれの優柔不断さを自嘲するのであった。

かくして多くの作家や詩人たちと親交を深めながら詩作に没頭しているうち，月船は長江らから詩集出版を勧められ，1925（大正14）年10月，抒情詩社から第一詩集『秋冷』を出版した。その結果，月船は「詩人になろうなぞとはついぞ思はなかった」のに詩人とみなされてしまうようになる。また，「小説家になりたいと常に願いながらも，詩集を出版したことで，とうとう詩人の列に組み込まれてしまい(5)」，以後，いつも詩人という肩書がつくようになるのである。こうしたことがまた，後年月船をしてわが国詠讃歌作詩の第一人者たらしめ，宗門の発展にも大きく貢献していく道を開くのである。

4　第一詩集『秋冷』――詩人としての地歩を確立

この詩集には，師生田長江と先輩詩人佐藤春夫が序文を寄せ，室生犀星が序詩，今東光が挿絵を描いて盛り上げた。詩集の構成は，目次・挿絵・本詩（3章63編）・跋文の順になっており，B6版函入，表紙（各2色刷）のシックな装幀，本文104ページ，定価90銭である。　師長田長江は次のような序文を寄せている。

水の如く……であり，……であり，そして特に清澄である。

グラスの如く，ビイドロの如く，ギアマンの如く……であり，……であり，そして特に透明である。

清澄なる水を，透明なるギアマンの器に汲んで，爽かなる午前の山蔭を，つつましく優雅なる裏通りの黄昏時を行く。

水は此上なく従順な，けれども往往にして意外に頑強な，意外に反撥的な存在である。

ギアマンほどにエキゾティックで，同時に傳統的で，古典的な容器はない。

その容器は，餘りに小さすぎ，それ故に余（ママ）りに可憐でありすぎる。だが，かなり多数の人人は，頑なに私の言葉を斥けて言ふかも知れない――『その容器は極めて小さく，それ故に一層可憐であり，優美であり，瀟洒であり，簡素であり，一層すべての

物であり得る』と。

ともあれ，透明な，小さなギアマンの容器には，清澄な水が極めてつつましやかに，極めて少量に運ばれてゐる。（中略）

……偖て，あの清澄な水の運搬者は，どこから其水を汲んで来たのであるか？

海からか？　あれはどうしても淡水である。

泉からか？　湧き立ての水ではない。

川からか？　静かに碧をたたへ，しづかに雲の影をうつしてゐなければならぬ。

さそうだ。明らかに彼はいつも山上の湖上から，あの清澄な水を汲み出して来るのである。このことを彼は，ややもすれば彼自身にさへ包みかくさうとしてゐるのではなからうか。

なぜと云つて，ギアマンの透明をあんなにも好きな彼は，あの湖畔の山山に畫かれ，刺繍され，象眼され，七寶される，あの複雑な其季節季節の色彩及び色彩の變化が，餘りにも複雑で，餘りにも御し難く，餘りにも自分の物らしく思はれるであらうから。そしてあの湖水自體が又餘りにも廣く，餘りにも深く，底しれぬ深さを有つて居り，餘りにも気味悪いものとして感じられるであらうから。

けれども，今日の彼は明日の彼ではない。彼には，此上更に彼らしい彼になるべき餘地が，まだまだ多分にありさうに見える。そして私達は，彼が彼の有つてゐる一番いいものを享楽し，また私達にも享楽させる為の，彼の湖水へ招待してくれるであらう日を好んで夢想してゐるのである。

……その招待の日に，水鳥の如く優美な軽快なボートが，彼の湖水に泛べられる。清澄な水の底深くかくれてゐるきたないどぶ泥を，何の必要もなく掻き廻はして見ようとか，彼自らに掻き廻はせて見ようとか云ふやうなことは，全然私達の念頭にのぼり得ない。私たちはただ知つてゐる――。

彼がまことに善き漕ぎ手であり，烈風の中にさへ，口笛を吹きながら三角帆を操る技術に於て，更に一層信頼すべきものを有つてゐるといふことを！　又私達が，すべてを彼の狡猾なる手腕と，忠實なるボートとに托していささかの不安もなしに，或は朝霧の長いトンネルを，夢の如く出てははひり，出てははひりしながら，或は正午時のやや息苦しい静けさへ，程よき微風とさざ波とを恵みながら，或は夕立のあとの鮮やかな虹を間近く背（うしろ）に負ひながら，彼の湖水の測りきれない深さをも心の内に測り，その水の面に映つてい（ママ）る白皚皚たる連山の頂の気高さをも，私達の胸一杯に吸ひこみ得るであらうといふことを！　　1925年7月10日[6]

総字数1500字に及ぶ長文もさることながら，当時わが国思想文学，文学評論の第一人者として評論界に君臨した文傑にふさわしい含蓄と文思に富んだ序文である。要するに長江は，月船の詩は「透明なガラスの容器に，山上の湖の澄んだ清水を注いだように」澄明で，「爽かなる午前の山蔭を，つつましく優雅なる裏通りの黄昏時を行く」ような趣であ

ると称賛。しかもこの水はこの上なく従順でありながら，頑強で反撥的な存在であり，またこのガラスたるや，この上なくエキゾティックで，伝統的で，古典的であると断じ，月船の詩の個性的風格と詩集の特徴とを明らかにしている。そして，「彼には，此上更に彼らしい彼になるべき余地が，まだまだ多分にありさうに見える。そして私達は，彼が彼の有つてゐる一番いいものを享楽し，また私達にも享楽させる為の，彼の湖水へ招待してくれるであらう日を好んで夢想してゐるのである。」と述べ，師としての立場からさらなる精進と飛躍を促し，大成への大きな期待を寄せているのである。

一門の長老佐藤春夫は，まず月船の詩には38編中22編に植物が登場することに着目。詩の中心は草や花のたぐいであり，それらに対して選び抜かれた形容詞や形容動詞を使用することによって，朗らかに澄んで慎み深い雰囲気が漂っていると批評。つづいて，「本当の豊富を学び得た人は天地の到底把捉しがたい豊富に驚嘆した上で，纔にその一掬を感謝するのである。彼等は饒舌よりも沈黙を，活動よりも静思を重んじるものだ。(7)」と述べる。その上で，月船はまさしくそうした姿勢で詩作に励み，「多くを感じて尠く言ふことに努めたことがまことによい。(8)」と称賛。最後に先輩詩人としての詩論を展開しながら次のような助言を与えている。

> 但，私にはもう一種の我我にとつて別様の豊富をだけこの詩人に勧めようとするのである。赤松月船君。君は多分，その手の離れるところ盡く黄金になつたといふ童話の王様のことを知つてゐられるであらう。――私のいふ意味は，一見必ずしも赤松月船的でない森羅万象も，一度君の心情によつて触れられた時には君の黄金になるであらうところのこの魔法的の豊富を君に望蜀したいといふのである。すべてのすぐれた詩人はそのやうな錬金術師であつた。詩の豊富とはまた恒にこの謂に外ならないのである。君は既に自然のなかから君らしいところのものを目敏くも抉出された。君の不屈の精進はこの次にはきつと自然のなかへもつと無雑作にもつと沢山のしかも飽くまで君らしいものを君らしく投影――いや放射するに違ひない。さうして君の月かげに濡れた蒐集物はその時，より一層豊富で，いや寧ろ君は，もの悉くに隈なき風情を賦興する月輪そのものになるに違ひない。要はただ我我の詩魂をいよいよ高めいよいよ跳梁させたいといふだけのことにしかすぎないのだが。赤松月船君。君が私の言ひたい放題のことを敢て漫言する人間として恕してくれるのに甘えて，私は常によき同志にのみ賛同して貰へる私の獨合點な詩論の一端を洩す相手を君に見出し得て，これ以上には所謂序文といふものの體には嫺はなかつた(9)。

室生犀星は，月船の第一詩集に序詩「歳月」を贈った。その詞書（ことばがき）に，「赤松月船君われに一詩をおくりてあたかもわれに幽かなる徳あらんが如く詠じぬ。われ一詩を互して同君にむくい，まことに漂渺たる月下の人におくらんとす。月下の人これをうけたまへ。(10)」と述べ，次のようによんでいる。実はこの序詩は，かつて月船が犀星に贈った「象牙のパイプ」と題する詩（1922年，同人誌「月光」に発表）への返礼の意味合いをもつもの

である。

けふ君が詩を読み／忘れたる長きパイプを取り出しぬ／あれは一年が間そをくはへざりき。// いま手に把れば象牙のやにの香りかそかに／けむりの穴ふさがりて／胸つまりたるごとく通らず，／ひととせのほこり立ち迷いぬ。／紙捩子（こより）をもてやにを沈めしに／明るくはけむり通りたり。// われそのパイプをくはへ／うら長屋悲しき庭をながむれど／うつりくる風景のすがたもなく，／向ひ家に風呂焚くならんコークスの匂ひ漂ひ／早や障子とざしかくれぬ。／まことに君とあひしは／世の平和若葉の上にありき。／君とはながく会はぬものかな。

こうした一門の丈人（じょうじん）や同人たちの厚意と激励に対して，月船はこの詩集の跋文で次のように謝意を表している。

――生田長江氏と野口米次郎氏と佐藤春夫氏とは私の先生だ。わけても生田氏と佐藤氏は雑誌「月光」の同人になつていただいた関係がある。単にそれだけの関係にはとどまらない，それにしたがってさまざまな場合に篤い心持を受けた。

室生犀星氏によつて與へられた影響も大きい。生田氏，佐藤氏，野口氏，そして室生氏――これらの先輩の詩作と言説とから，私の気質が開発されたことを悦びたい。わけても長江先生の薫陶は言葉につくし得ない感謝だ[11]。（以下略）

月船はこのように，特に恩師長江に対して繰り返し感謝の衷款を捧げているのである。第一詩集『秋冷』は大きな反響を呼びながら世に迎えられた。例えば,『現代詩人研究』（山本和夫著）では，月船を「自己の気質に従って伝統の風景を描こうとしている詩人」と批評。集中の「秋冷」と題する次の詩――

深い渓流に臨んだ／断崖の家の窓から乗り出し／髪をすきながら／その白い裸体を／惜しげもなく／朝の嵐気に晒らしてゐる婦（をんな）は／何といふ爽かな秋冷でせう！

――を紹介して，「これらの作品の中には，激しい気風が稲妻のやうに閃めいてゐる。隙のない構えが，キッとなって読者を睨んでゐる。[12]」と評している。

第一詩集『秋冷』が好評を博した月船は，詩人として自他共に認めるところとなり，爾来百歳の天寿を全うして没するまでの 70 余年間，詩人としてめざましい活躍をする。自らの詩作活動に精励するだけでなく，同人詩誌「朝」（のち「氾濫」と改題）を主宰したり，各種詩誌の選者を務めたりするほか，後進の育成や詩論書の執筆などにも力を注いだ。特に晩年は「連峰」同人としても活躍，日本詩壇の興隆に大きな貢献をした。

詩に関する著作（詩集を含む）をしては，前記『秋冷』のほか,『新作詩入門』（昭和３年，大京堂書店),『新興詩人選集』（昭和５年，文芸社),『花粉の日』（昭和５年，交蘭社),『明るきセレナード』（昭和 22 年，合同新聞社),『赤松月船全詩集』（昭和 58 年，永田書房）などがある。

なお月船は，詩作活動と仏教教理の体得とを融合させた「詠讃歌」の世界に新境地を開拓，わが国における詠讃歌作詞の最高権威として仏教界に君臨した。昭和 57 年に仏教情

報センターから刊行した「赤松月船自撰詠讃歌集」は自らの坐禅体験もにじみ出たものであり，斯道の指針となるだけでなく詠道教化の一翼を担う書として馨香を放っている。

５　『新作詩入門』――詩への情熱と詩人としての自負

月船は1928（昭和３）年５月20日『新作詩入門』（Ｂ６変型判，210ページ）を大京堂書店から出版した。これは形式的には師生田長江との共著となっているが，実際には月船が執筆し長江の校閲を経て出来上ったものである。したがってこの書には月船の「詩」への熱意と意欲が奔出しているだけでなく，月船の「詩人」としての自信と自負もまた横溢している。それはまた，月船が長江門下に入って以来長江から指導を受けながら体得した「詩」の本質及び「詩作上」の諸問題についての根本的な知識を披瀝したものであり，長江と月船との詩観が如実に表出されている。その主な詩観を探ってみると次のとおりである。

（１）「詩は知識でもなく科学でもなく芸術である」と断じ，「詩」を「科学」の対立軸におく。「創作すること」や「人をよき世界に踏み込ませる」ことに詩の本質がある。したがって「詩」への対応としては，作法の規則を知るよりは創作意志を喚起刺衝することのほうが重要である。

（２）人間の精神活動を二大別して，①想像作用（あるものを基礎にして新しいものを創り出すこと）と，②理知作用（二者がいかなる関係にあるかを調べること）とする。前者は創造し総合し「あろうとすること」に対する働きであって，詩・小説・戯曲の類はこうした精神活動の所産である。後者は推理し分析し「あったこと，あること」に対する働きであって，これこそが「科学」である。

（３）詩は散文とは対立しない。散文そのものも詩である。したがって詩を形体的に分類して，①抒情詩（情を抒（の）べる＝感情的詩）と，②叙事詩（事を叙し事を描く＝理知的詩＝小説や物語も含む）とする。前者は「うたう」，後者は「描く」働きである。

（４）抒情詩は「韻律詩」と「自由詩」に区別される。「韻律詩」の韻律には音数と押韻（頭韻・脚韻）の２種がある。韻とは調子のことであり，快感を覚えさせ感情を昂揚させるものである。「自由詩」は詩における韻律を破ったもので，そのリズムを外に求めず内に求めたものであり，散文詩は自由詩の中に入れるべきである。ただし自由詩は韻律詩から進み，散文詩は叙事詩から歩み寄ったものである。したがって自由詩には韻律詩の面影が存し，散文詩は叙事的様相を呈する。ただし散文詩は「抒情詩」であって感情を「うたって」おり，「叙事詩」は事を「描いて」いる。散文詩の創始者はツルゲーネフである。

（５）小曲（ソネット）は「十四行詩」と称し，ヨーロッパにおける最短詩形で，八・六行方式と，十二（四・四・四）・二行方式の２種がある。わが国におけるすぐれた小曲作者としては北原白秋があげられる。（筆者注＝これは月船の大きな認識不足。当時日本における小曲の第一人者は薄田泣菫である。泣菫をさしおいて当時の小曲作者を語る

ことは不適当である。）

（６）言葉は人間の生活・感情から自然に生まれる。ゆえに自分の生活・感情さながらに表現すれば自分のものとしての香りなり色なり調子なりが出てくる。そこで他人の美しい言葉を借用したのでは，自分の生活・感情が伴っていないので不自然極まりない。美しい言葉が葉であるとすれば，美しい生活・美しい感情は根であり幹である。葉だけ取ってきたのではその葉は生きているはずがない。だから詩人は自分自身が美しい生活・美しい感情を持つように努めるべきである。そして詩人の言葉はあらゆる場合において生きた感情に即したものでなければならぬ。陳腐な因襲的観念を打破したものでなければならぬ。饒舌は詩人のためによくない。「言葉多きは品少なし」というがごとく，詩人は無口なのがよい。その無口な詩人をして口を開かしめるのは感情の発動である。極言すれば感情の発動を無口で以って表現するのが真の詩人である。この意味において詩人は言葉を尠なく用いる心掛がなければならぬ。

次に本書の「現代詩」の章では，当代を代表する７人の詩人（野口米次郎，佐藤春夫，生田長江，大藤治郎，佐藤惣之助，尾崎喜八，室生犀星）の詩を各数編紹介しその特徴を解説している。そのうち生田長江については，「生田長江氏のような文芸批評詩や社会批評詩でも書けるようなしっかりした頭の持主こそ本当に詩を書くべきであり，そういう人が詩を書かなければいい詩は出来ない。[13]」と道破し，長江の詩７編を載録。その清々しい感傷と静澄なリズムを絶賛している。

そのうちの１編「胡桃」を掲げる。ちなみにこの詩はソネット形式であり，長江は当時薄田泣菫がヨーロッパから移入したソネット詩の詩作に挑戦し成功を収めていたといえる。

胡桃よ，胡桃よ，私の手の中の可愛いい胡桃よ。
お前がこの手の中へはいつてからも，
私の物と云はれるやうになつてからも久しいものだ。
そしてお前はいついつまでも私の物だ。

けれども，可愛いい私の胡桃よ。
お前の甘い，不可思議な甘さを封じてゐる
殻の硬いこと，お前の殻のさても硬いこと！

私に対する疑ひは，それよりもお前自身のぶらいどは
割り砕くことの出来ないお前の殻は，
いつも私の太息（ためいき）になる。

胡桃よ，胡桃よ，私の手の中の可愛いい胡桃よ。
これまでかうして太息をついて来た私は

いつまでもお前の中味に飢(ママ)えながら，
いたづらに私の物をもつてゐる！　（この詩に対する月船の「評解」略）

6　長江の他界と顕彰碑――月船の献詩「長田長江先生の碑に題す」

1920年（大正9）年，長田長江に入門して詩窖を磨き，爾来長江を人生の師表と仰ぎながら文学活動に専念してきた月船は，1936（昭和11）年1月11日，長江逝去という痛恨事に遭遇する。時に長江55歳，月船39歳であった。

恩師と幽明境を異にした月船は茫然自失，東京での文学活動にも希望を失う。折しも，宗門では岡山県内叢林の後継者問題が急浮上，月船は宗門からの強い要請を受けて帰郷を決意する。このとき月船は，森鴎外の小説「安井夫人」の主人公の生き方――「ものになるか，ならないかが問題ではなく，何物かをみつめていく姿勢」に共鳴し，「山奥にはいって自分をみつめながら生きてゆこう」と決心。あえて山間の草深い山寺への皈住を希望した。かくして月船は岡山県川上郡平川村（現高梁市備中町平川）の観音寺住職として18年ぶりに仏門に復帰する。時あたかも1936（昭和11）年2月，月船は二・二六事件直前の東京の緊迫した空気を肌で感じながらも，新たな人生への思いを秘めて帰郷したのである。

平川観音寺に着任した月船は住職をつとめる（一時期同村助役，続いて村長をも兼務する）かたわら，作詩活動に精励するとともに，詠讃歌・校歌の作詞，仏教童話の執筆，仏教理論解説書の出版，地域文化の啓蒙など，旺盛な文筆活動を展開する。こうした幅広い知的活動の原動力は，まさしく師生田長江から受けた指導と薫陶の賜物であるといってよいであろう。

長江の没後22年を経て，出身地鳥取県日野郡根雨町（現日野町根雨）の延暦寺境内に，同町教育委員会が中心となって長江の顕彰碑が建立された。延暦寺は長江が幼少のころ，同寺松本大典和尚から漢籍の指導を受けたゆかりの梵城である。

その顕彰碑除幕式が1958（昭和33）年11月1日に執り行われた。式典に参列した月船は次の詩を捧げて，師の遺徳をたたえた。

生田長江先生の碑に題す

雪かつぐ　　押し流る
雪の大山！　　日野の流れは
靡(なび)なかしむ，人をも，空も。　　ゆるびなく
　　すずろぎゆくよ！

反歌　端正を清潔とが，いきいきと呼吸(いき)づきて，こは，いしぶみにあらざりにけり

師長江の人間像を仰ぎ見る霊峰大山にたとえ，その遺徳がとこしえに尽きないであろうことを日野川の清流に託した詩である。偉大な存在で，かつ甚大な感化を受けた師への限りない崇敬の念が吐露された詩である。

なお，この顕彰碑除幕式には一門の長老佐藤春夫も参列する予定であったが，急遽欠席

することになり，同門の丈人伊福部隆輝が佐藤の詩を代読した。

老軀，文債山をなせる上に，／近来はらわたをいためて，／長途の旅に堪えざるに似たり。／心ならずも根雨の里に得参らねば，／額垂（ぬか）れて師のいしぶみに涙せん。／ふたりの友をねたむころかな。　（筆者注＝ふたりの友とは赤松月船と伊福部隆輝）

長江の顕彰碑は上下２段積みの豪華なものである。上段（横長の長方形）には長江の肖像のレリーフと「一の信條」と題する長江自筆の言葉が刻まれている。

一の信條　　生田長江

私は信じてゐる――第一に科學的なるもの眞と，第二に道徳的なるもの善と，第三に藝術的なるもの美と，此三者はつねに宗教的なるもの聖に統合せられて，三位一體をなすべきことを。

また下段（正方形）には佐藤春夫の撰書による碑文が刻まれている。（本稿載録略）

こうした偉大なる師生田長江に佐藤春夫らとともに師事した月船は，長江の「芦の湖」と題する詩が好きで，これを終生座右の銘とした。

芦の湖　ひややかにみづをたたえて／かくあればひとはしらじな／ひをふきしやまのあととも

これは火山湖の姿をうたったものである。火山湖はいま静かに，穏やかに澄みきった水をたたえている。しかし，かつては灼熱の火泥や火炎を噴出していたことを知る人はいないであろうという意味である。人間として大成したのち，心静かに，粛然と処世している人も，その若き日には烈火のごときエネルギーを燃焼させてきたはずだとの意である。逆をいえば，人間にもはげしい情熱を燃えたぎらせた青春時代があり，しかるのち現在の円熟した人格，老成した豊潤な思想が形成されているのだということの謂である。

それは，あふれんばかりの情熱や豊かな学識を内に蔵しつつも，謙虚につつましく生きるべきだという，月船自らの人生観そのものに通ずるものであったに違いない。

引用文献

（1）山陽新聞社編集局編『歳月の記――岡山文化人像――』山陽新聞社，1971年，15頁
（2）定金恒次『慧僧詩人赤松月船』　西日本法規出版，2004年，60頁
（3）山陽新聞社編集局編『歳月の記――岡山文化人像――』山陽新聞社，1971年，15頁
（4）山陽新聞社編集局編『歳月の記――岡山文化人像――』山陽新聞社，1971年，17頁
（5）定金恒次『禅と詩　赤松月船の生涯』　西日本法規出版，2003年，41頁
（6）赤松月船『赤松月船全詩集』　永田書房，1983年，７～10頁
（7）赤松月船『赤松月船全詩集』　永田書房，1983年，12頁
（8）赤松月船『赤松月船全詩集』　永田書房，1983年，13頁
（9）赤松月船『赤松月船全詩集』　永田書房，1983年，14頁
(10) 赤松月船『赤松月船全詩集』　永田書房，1983年，15頁
(11) 赤松月船『赤松月船全詩集』　永田書房，1983年，104～105頁
(12) 定金恒次『赤松月船の世界』　日本文教出版，2004年，73頁
(13) 生田長江・赤松月船『新作詩法入門』　大京堂書店，1928年，142頁

Gessen Akamatsu, A Pupil of Choko Ikuta —Formation and Establishment of the Poetic World of Gessen Akamatsu—

Tsuneji SADAKANE
Courses in Japan Studies for Students from Overseas
Kurashiki University of Science and Arts,
2460 Nishinoura, Tsurajima-cho,Kurashiki-shi,Okayama 712-8505,Japan
(Received October 10, 2007)

Gesen Akamatsu (a high priest born in Kamogata Town, Okayama prefecture, 1897～1997) tried to find in “literature” a way to solve the conflicts between earthly desires (passions) and Buddhist discipline (Zen meditation) which he had suffered during his self-discipline in Eiheiji, the head temple of the Soto sect.

In 1918, Gessen, who was 21 years old, decided to go to Tokyo. Before long he quit being a priest to start his full training of literature, and he succeeded as a man of letters (a poet).

The purpose of this paper is to state what instruction Gessen received under the guidance of Choko Ikuta (a critic and translator, 1882～1936) and how Gessen grew as a poet in Tokyo.Besides, this paper clarifies the master-pupil relationship between Choko and Gessen, and defines Gessen’s activity in the Japanese poetry world.